

購入時のアドバイス

銘柄によって、各種の安全機能や容量、湯の沸く時間、消費電力量、使用方法等に違いがあるため、カタログや取扱説明書等をよく確かめてから自分に合ったものを選びましょう。

ケトルが転倒した場合に湯が流出しないなど、より安全な銘柄を選びたい場合、販売店の電気製品専門スタッフに説明を求め、Sマークが付いている銘柄を選ぶと安心です。

「給水口が大きく、蓋を外すことができる銘柄は給水や手入れがしやすい」等のモニターによる使用性テスト結果*なども参考にしてください。
※テスト結果についてはこちらも参考にしてください。

http://www.pref.toyama.jp/branches/1731/pdf/H27syohin_test.pdf



使用時のアドバイス

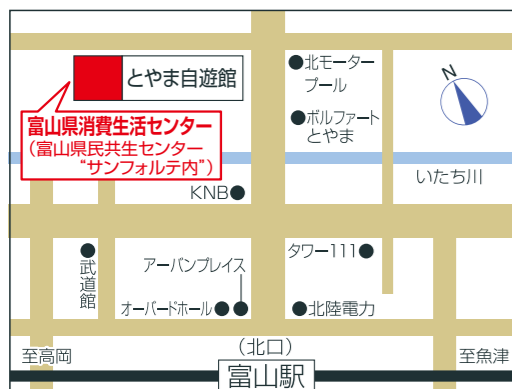
ケトル全体がかなり熱くなる銘柄や転倒時湯漏れを起こす銘柄もあるので、十分注意し、特に子供のいる家庭では、子供だけで使わせない。また、幼児の手の届くところでは使わないようにしましょう。

消費電力900~1300Wが主流であり、他の器具と併用するとコンセント部が異常発熱して発火するおそれがあることから、定格15アンペア以上のコンセントを単独で使用し、使用時以外はプラグを抜いておきましょう。

銘柄によって給湯ロックや電源ボタンの位置等が異なり、使い方を誤るとやけど等のおそれがあるため、取扱説明書をよく読んでから使用しましょう。

蓋が閉まっていなくて電源が自動で切れない銘柄があり、給湯時のやけどを防ぐためにも、蓋を確実に閉めて使用してください。

湯が吹きこぼれ、やけどをするおそれがあるため、満水目盛り以上の水は入れてはいけません。



お問い合わせは

富山県消費生活センター

〒930-0805 富山市湊入船町6-7 (富山県民共生センター1階)
TEL (076) 432-2949 FAX (076) 431-2631

富山県消費生活センターホームページ
<http://www.pref.toyama.jp/branches/1731/1731.htm>

電気ケトル

2016

商品テスト情報

こんな電気ケトルをテストしました



電気ケトルは、必要な時に必要な量だけ手軽に湯を沸かすことができるため、単身世帯を中心に広く普及しています。その一方で、「ケトルを使用する際に側面に触れてやけどをした」、「ケトルが転倒した際に流れ出た熱湯でやけどをした」等の事故が報告されています。

このため、北陸三県(富山県、石川県、福井県)の消費生活(支援)センターが共同で、電気ケトルの表示や安全性、性能、使用性をテストしたので、その結果や購入時及び使用時等の留意点をお知らせします。

対象品は、家電量販店、電気店、ホームセンター等の店舗で購入した9銘柄の電気ケトルで、税込み1万円以内、定格容量（満水容量）は1ℓ以内を目安としました。

表示は…

電気用品安全法に定める「定格電圧、定格消費電力、定格周波数、事業者名、PSEマーク」の表示および家庭用品品質表示法「電気ポット」に準ずる「定格容量、使用上の注意、表示者名等」の表示は、全銘柄で適正になされていました。

電気製品の安全のため、第三者認証機関が製品試験や品質管理の調査を行い、安全性を客観的に確認したことを示すSマークは、任意ですが、6銘柄で表示されていました。



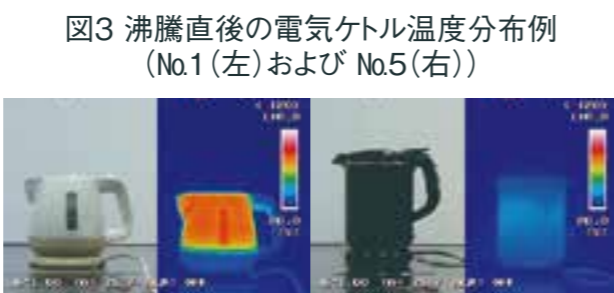
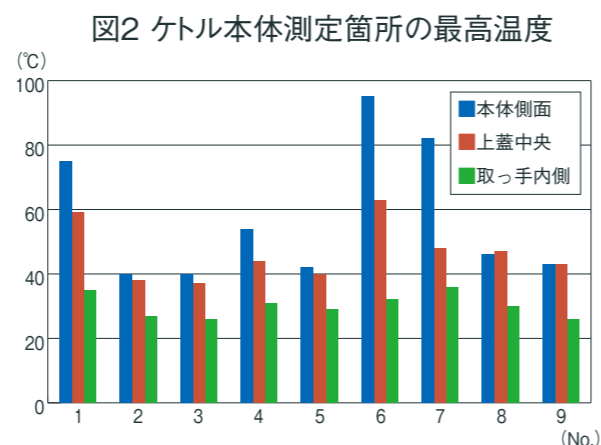
「直火や電気ヒーター、電磁調理器プレートに載せない」、「定格15A以上交流100Vのコンセントを単独で使う」、「水につけたりぬらしたりしない」、「使用時以外はプラグをコンセントから抜く」、「子供だけで使わせたり、幼児の手の届くところで使わない」、「満水目盛り以上の水を入れない」、「ケトルを転倒させない」、「注ぎ口に触ったり、手や顔を近づけたりしない」、「湯沸し中はふたを開けたまま使用しない」等の「使用上の注意」が全銘柄に記載されていました。

表面温度は…

定格容量の湯を沸かす際、本体各部（側面、上蓋中央、取っ手内側）の表面温度を測定したところ、図2に示すとおり、本体側面の最高温度が75℃以上になるものが3銘柄ありました（No.1、6、7）。上蓋中央では全銘柄で65℃未満、取っ手内側では全銘柄で40℃未満でした。

JISでは「持ち運び用の取っ手の温度を80℃以下、スイッチ等のつまみおよび押ボタンの温度を75℃以下」としていますが、本体側面の温度限度は定められていません。本体側面が100℃近くまで上昇する銘柄もあるため、取扱いの際には注意が必要です。

参考として、熱画像処理装置で撮影した沸騰直後におけるケトル本体の温度分布例を図3に示しています。



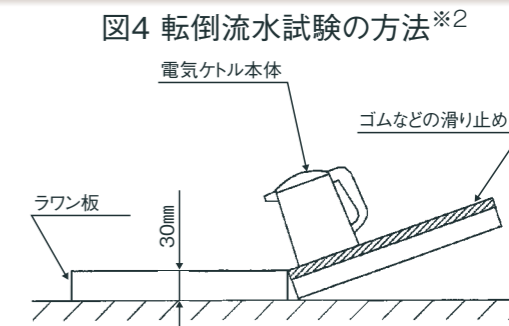
転倒時の流水は…

「転倒流水試験※1」は、日本工業規格『電気ポット』（JIS C9213）を準用して行い（図4参照）、転倒方向は注ぎ口に対して前後左右の4方向としました。

4方向のいずれからも業界自主基準値である50mlを超える流水が3銘柄（No.1、6、7）で見られました。

また、流水があったものの、基準値以下であったものは4銘柄（No.2、3、4、8）で、残り2銘柄（No.5、9）はどの転倒方向からも流水がありませんでした。

なお、今回のテストで基準を満たしていた6銘柄にはSマークが表示されています。



※1：転倒流水試験の概要 電気ケトルに定格容量の水を入れ、図4に示す水平に保った台の上に本体を載せ静かに傾け、ラワン板上に転倒させ10秒間の流出水量を測定する。基準流出水量は50ml以下。

※2：電気製品認証協議会「電気湯沸器（電気ケトル及び電気ポット）の転倒流水対策に係る取扱運用」より引用

消費電力と湯沸し時間は…

○ 待機時の消費電力

1銘柄（No.9）が0.2W、残りの銘柄は全て0.0Wでした。いずれにしても、省エネや安全性の観点から、使用時以外に電源プラグをコンセントから抜くことは大切と思われます。

○ 稼働時の消費電力

稼働時（定格容量や140mlの湯を沸かす時）の消費電力と表示されている定格消費電力との差は、全ての銘柄で、電気用品の技術上の基準を定める省令の基準の範囲内でした。

○ 所要時間

各銘柄の定格容量の湯を沸かすのに要する時間は、2分50秒～7分31秒でした。

カップ1杯分（140ml、水温23℃、室温23℃）の湯を沸かすのに要する時間は、図5に示すとおり、50秒～2分35秒と銘柄間で約3倍の差がみられました。

○ 消費電力量

定格容量の湯を沸かすのに要する消費電力量は、58～112Whでした。

カップ1杯分の湯を沸かすのに要する消費電力量は、図5に示すとおり、16～42Whと銘柄間で約2.6倍の差がみられました。

